

要 報

解 剖 學

儒艮の解體所見 青木文一郎・立石新吉・田中亮・古畑北雄, 科學の臺灣 6, 491-518, 昭和13年11月20日, 臺大理農動物

儒艮は臺灣に於いては昭和8年以來天然記念物として指定されて居る動物であるが, 偶々昭和12年3月25日フィリピン北部カミギン島沖で是が捕獲の報あり, 次いで是を高雄に持參冷凍の後臺灣總督府博物館に於いて入手購入する事となつた次第である。臺北に輸送後暫時臺北帝大動物學教室附屬の冷凍室に保存し, 同年7月20日同教室員並に博物館関係者等の手に依つて解體が行はれた。皮革及骨骼は各標本として總督府博物館に保存し, 一方内臓は教室に於いてそれぞれ處理し研究の結果が一先づ本報告となつた次第である。捕獲後數ヶ月を経過して解剖が行はれたに係らず材料の保存状態は甚だ良好であつて, 冷凍事業の進歩と普遍化とが, 特に熱帶地に於けるこの種研究の一過程として重要な役割を持ち得る事の良い例證ともなつた次第である。

この個體は體長凡そ2.5 m許りの成熟した雌であつて, 解體の進行中計らずも出産間近い胎兒(雌)がある事を發見, 是に就いても記載を加へた。記載は先づ外部形態, 各部の測定に始め, 内臓に及んで消化, 呼吸, 泌尿生殖, 循環等の諸器官並びに甲状腺等に就いて記した。挿入寫眞20葉, その中胎兒に関するもの3, 外形3を除く外は皆内臓に関するものであつて, 印刷技術も亦外地としては相當な出来であり記事の理解を助くる處少なからざるものと思はれる。

分 類 學

吸蟲類の一新屬 *Microphalloides* On a newgenus *Microphalloides* of the trematode. 田貞雄, 彙報 17, 327-337, 昭和13年11月18日, 大阪帝大微研

去る1916年余はアシハラガニ(當時ハマガニと稱した)に寄生する一種の被囊幼吸蟲を記載報告した。處が米人 OSBORN は私の記載を見て自分の研究した一新種と共に之を *Microphallus* 屬中に入れ之に *M. japonicus* なる種名を與へた。爾來久しい間母蟲が發見されずにあつたが, 常に此の種名を以て諸處に引用記載せられてゐた。然るに1936年5月に九大の高崎一郎氏が福岡及び熊本の海岸で得たアシハラガニ體内の一被囊幼吸蟲を鼠等に試食せしめて母蟲を育成せられた。其の母蟲の同定につき私に相談があつたので, 其の後同氏と共に母蟲の研究を重ねた結果によると OSBORN の云ふ *Microphallus* 屬のものと大に異なる點がある事を發見したので之を新屬とした。而し大體本屬に似てゐる點から *Microphalloides* なる屬名を用ふる事にした。

其の主な特徴で *Microphallus* と異なつてゐる點は卵黄腺の形態と其の位置で *Microphallus* 屬では塊状で腸管の後方にあるが本新屬では7-9個の胞状體から成り腸管前方に位してゐる。次に雄性生殖管の末端の構造で *Microphallus* では陰莖囊がないが, 本屬にあつては明かに半月形乃至略塊状をなす陰莖囊があつて其兩端に一種特別の構造を有してゐる一部がある。該部の作用等は尙不明である。

本蟲は被囊幼蟲時代に體内の構造は殆ど完成し母蟲に酷似し只僅かに生殖器の發達不十分である位だから, 之を試験動物に試食せしむると直に生殖器完成して母蟲となる。即ち試食後12時間のものには既に生殖器が完成してゐる。

本蟲の自然の最終宿主は尙不明であるが實驗的には二十日鼠, 白鼠, モルモット, 犬及び雀等に感染せしむる事が出来る。恐らく野鼠其他の野獸乃至肉食する鳥類が固有の最終宿主ではあるまいか。之に就いては尙後日の研究に俟たねばならぬ。